

# 阿妻一直の『札幌焼・盤溪窯』 生い立ちの記

独立時代↓(出会い)

一直焼・盤溪窯(その8)

前回は、盤溪窯での薪窯(穴窯)で得られる、自然釉と、釉薬に付いて、触れました、今回は、少し詳しく述べさせてもらいます。

自然釉は、私の窯元では、薪窯(穴窯)で薪を焚き続ける事により、窯の中の作品に、薪の灰が降り積もり、長時間の窯焼きの間に、窯の中の温度も高温に上昇し(最終温度約1300℃)、灰も溶けてきます(ガラス化)、この溶けた状態を、自然釉と呼び、自然釉本来の姿ですと説明しました。



日本では約1万年数千年前の、土器が発見されており、世界最古と言われております。しかし陶芸としての発展は、紀元4〜

5世紀半ば(飛鳥時代)ごろに、朝鮮から須恵器の製造技術として窯(穴窯)が伝わったことで、1000度以上の高温焼成が可能になり、須恵器に見られるように、水漏れしない、壊れにくいものが焼けるようになり、自然釉の掛った作品が沢山得る事が出来るようになったのだろ

うと思います。この自然釉は、じつは窯の中に入っている作品全部に掛るわけでは無く、窯の焚き口に近い、薪が燃えている周りが、一番多く灰が掛ります。そして焚き口から遠い煙突の方に近づきますと、灰の掛りが少

なくなってきました。おそらく、自然釉の沢山掛った品を数多く得るのに、かなりの試行錯誤を繰り返した結果、自然にかかる自然釉の他に、薪の灰を作品に直接塗る(施釉)方法に発展したのだらうと思います。

薪の灰は、灰だけでも、高温で溶けて釉薬の状態になります。日本の焼き物の釉薬は、この自然釉から↓薪の灰だけの、灰釉がベースになり、中国からの技術と相まって様々な独自の釉薬が発達して来たのだと思います。薪窯(穴窯)によつて得ることが出来る自然釉の説明を、前回から、しておりますが、碧海波(海鼠釉)の説明に入りたいと思います。

私の窯元の釉薬は、原料に石灰(せつかい)・長石(ちようせき)・珪石(けいせき)を主原料としております。その中で、木灰・土灰(薪の灰)を石灰の代わり

に、藁灰(稲藁を燃やした灰)を珪石の代わりに使用します。

この、木灰・藁灰・長石が、基本原料となります。

碧海波釉(海鼠釉)は、基本原料に青色の安定として、コバルトを数パーセント入れます。私のところの釉薬は基本的には

単純な割合でして、基本的には、あまりいじらずに、粘土の割合の比率や種類を、いじりながら変化を変えていきます。

粘土は白土と赤土を使い、赤土は、有色粘土ですが、酸化鉄分等が含まれております。

釉薬は、粘土の違いと、窯の焚き方の違いにより、同じ釉薬を使用してもかなりの違い変化に焼き上がります。

窯焚きの手法に、酸化焼成と還元焼成という、性質の違い、相反する窯焚きの方法が有ります。詳しくは、又違う機会に説明します。